

2013 2/26

No.1941

毎月第2・第4火曜日発行

政経 かながわ

一般社団法人
— 神奈川政経懇話会 —



宮ヶ瀬湖畔をイルミネーションで彩るバレンタインイベントが9日、清川村宮ヶ瀬で始まった。会場の大階段にはハート形のアーチと光のトンネルのようなイルミネーションが登場し、カップルや親子連れが撮影を楽しんでいた。14日まで。



視点・点描	3
島の宝 在来野菜を後世に	
講演録	4
「はじまりは坂の途中で ～日本文学から日本人について学べるものとは」 ロバート キャンベル	
政治	6
危機突破の方策急ぐ 国土強靱化で財政出動	
国際	8
中国、硬軟両様で圧力 試される安倍外交	
国際	10
マリ、戦闘泥沼化の可能性 周辺諸国にテロの脅威拡散	
くらし2013	12
帯状疱疹の実態明らかに	
広告珍談	14
～うまい物がたり⑨ 広告から学ぼう	
政治反射鏡	15
降り掛かる外交問題 日米中3カ国関係鍵に	

事務局だより

◇横浜定例講演会

2013年3月13日（水）

富士ゼロックス神奈川株式会社と共催

ホテル、ニューグランド「レインボーボールルーム」

▽特別講演 15時30分～16時30分。講師は元ヤクルトスワローズ監督の古田 敦也氏、演題は「優柔決断のすすめ」

▽基調講演 16時40分～17時40分。講師は第29代海上幕僚長の赤星 慶治氏、演題は「日本における周辺情勢」

▽懇親会「神奈川情報交流会」17時50分～19時30分、「ペリー来航の間」

視点 点描



島の宝 在来野菜を後世に

しまう可能性も出てきた。

こうした事態を回避する策として考えられたのが、農業に関心のある島内外の若者らに協力を呼び掛け、城ヶ島野菜栽培の新たな担い手になってもらうというプロジェクトだ。

今年1月には、このプロジェクトの推進母体となる「城ヶ島野菜をつなぐ会」の初会合が現地で開催され、農業に関心を寄せる十数人が参加。地元の老人会の会長で、会の代表に選ばれた村田吉雄さんはあいさつで「島で愛されてきた種がなくなってしまうのは寂しい。島の住民以外の若い世代の人たちと一緒に一過性に終わらせない活動をしていきたい」と抱負を語った。また、会員同士の意見交換会では「奈良県には伝統ある『大和野菜』の継承を通して元気づけた地域がある」などと、在来

野菜に関する先進事例も紹介された。伝統野菜の種を後世に残す営みの場となるのは、会が借りた広さ約400平方メートルの畑で、2月上旬には、第1回の農作業にメンバーが汗を流している。

城ヶ島野菜は、その地域の風土にはぐくまれてきた食文化そのものであり「島の宝」といえよう。それが島内外の若者らの熱意によって守られ次の世代へと受け継がれるのだとしたら、すばらしいことだ。

農業を通じたお年寄りと若者との交流には、地域の活性化という副次的効果も期待できそうだ。いずれは京野菜と肩を並べるブランド野菜に。一粒の小さな種に大きな夢を託してみたい。そんな気持ちにさせる面白い話題である。

(神奈川新聞社

統合編集局次長 宮本 敏也)

昨年没後70年を迎えた詩人・北

原白秋ゆかりの島といえば、三浦半島最南端の城ヶ島である。代表作の一つ、「城ヶ島の雨」の歌碑が残るロマンあふれる同島を舞台に、農業従事者の高齢化で栽培の継続が危ぶまれる島特有の在来野菜を、若者らの手で後世に残そうという取り組みが本格化している。

同島では、雑煮に欠かせない食材として島民に親しまれてきた正

月菜、豆自体は小ぶりながら味の

良いソラマメ、草ネギなどの在来野菜が、主に自給用に農家で栽培されてきた。代々、種取りをしては畑にまき、地域で食べ続けられてきた伝統の野菜、「城ヶ島野菜」である。

ところが、栽培の担い手である農家の高齢化が進むなかで、このまま何の手も打たなければ城ヶ島野菜の栽培が近い将来、途絶えて

広告から学ぼう

まず、下の広告をご覧ください。

では、細部を見よう。①のよこ

ど前、ポルトガルから伝来した砂糖菓子カラメロに由来するとい

キヤラメルはおよそ300年ほ

すべて、右から左へ書かれている。右書きが左書きになったのはいつか、これも教材になっただろう。

ち回ったが、門前払いの日々。ならば市民に現物を見せようと、人力車メーカーに、絵漆塗りの動くシヨウウインドウをつくらせた。

た、「新聞広告で見つけよう」から転載した。子供たちが広告から、暮らしの移り変わりを学ぶという児童書である。子供は新聞なんぞ興味ないと思いがちだが、とんでもない。彼らは、教育に新聞を取り入れる運動、NIE (Newspaper in education) によって、学校で新聞を作っている。活字離れ・新聞離れがすすむ大人以上に、新聞は身近にあり、広告も存在するのである。

代の要求なり」と受けている。

出勤するお父さんに、キヤラメル持ってつと坊や。これでは好きなタバコも、躊躇せざるをえない。②はキヤラメルの価格で大は10銭、

この広告の現物には、①と②は入っていない。1915 (大正4) 年掲載された当時、すでに起こっていた禁煙運動や、貨幣価値まで教えようとする、その本の編集姿勢である。

小は5銭。「1銭は1円の100分の1」と教える。どこで買えるか、左上に菓子店・煙草店・食料品店・化粧品店・鉄道構内と分かりやすい。

もうひとつ大切なこと。文字が

は東京・溜池の小さな工房で西洋菓子を作って、市内の有名店に持

て発売した。

長年、アメリカで修行した森永



ルマを引いて、町から町へと歩いた。キヤラメルは1粒ずつワツクスパーパーに包み、1粒5厘のバラ売り。しかし、売れ行きは芳しくなかった。

バラではなく、箱入りはどうかと考えた。14 (大正3) 年、上野で開催された大正博覧会で20粒、紙箱に入れ1箱、10銭。売れて売れて、キヤラメルの森永と人は呼んだ。

紙箱は工作材料になり、子供たちはモノづくりに取り組んだ。とうとう森永は、その作品コンクールを主催するまでになった。

(美術エッセイスト、茅ヶ崎市在住) 「図」 「森永ミルクキャラメル」の 広告・1915 (大正4) 年12月、朝日新聞掲載